

ヨハネによる福音書 1章6-8節、19-28節
『あの方を指さして生きる』

アドヴェントの第2主日を迎えました。教会は長い歴史の中で教会暦に基づく聖書日課というものはぐくんできました。この日には、この聖書箇所を読む、という具合にして、3年ぐらいで聖書全体を読み通すものが多いのですが、その聖書日課でアドヴェントの主の日に読む聖書箇所としてあげられているのは、もちろんクリスマスにかかわる聖書箇所です。しかしその中であって、必ず取り上げられる聖書箇所があります。それは洗礼者ヨハネに関する聖書箇所です。

どうしてアドヴェントの時に、洗礼者ヨハネについて聞くよう聖書日課は定めているのでしょうか。不思議と言えば不思議です。なぜ、洗礼者ヨハネなのか。しかもなぜアドヴェントのときに読むのか。

洗礼者ヨハネのことは四つの福音書すべてに書かれています。しかもそれぞれの福音書が、それぞれの視点で、この人物のことをしっかりと書いています。例えば、ルカ福音書は生まれるいきさつから書き起こしていますし、マタイはヨハネの教えや、ヨハネのもとに集まった人々のことも詳しく書かれています。四つの福音書とも破格の扱い、と言っている。そもそも、イエス・キリストは、ヨハネから洗礼を受けているのです。それ自体驚くべきことです。福音書の中でもヨハネに対する評価は、抜きんでて高い、といえます。

キリストがヨハネから洗礼を受けたころ、ヨハネは、ヨルダン川で教えを宣べ伝えていました。彼の許にはユダヤ全土から多くの人々が押し寄せ、彼の前で罪の告白をし、彼から洗礼を受けていました。ヨハネ教団とでも呼ぶべき、大きな集団が生まれていました。多くの人々がヨハネこそが救い主なのではないか、と期待するほどでした。まさに飛ぶ鳥落とす勢いでした。

まことに優れた人だった、というだけでなく、魅力的なキャラクター、カリスマ的な賜物、何よりも彼の言葉に力があつた。多くの人が彼の前で罪を告白した、というのは、彼の器がそうさせたのでしょうか。

しかし、ヨハネの驚くべき点はそこにあつたのではない。彼の驚くべきは、彼が人々から注目を集め、メシアではないのか、と期待を寄せたときに、自分とは何者か、自分の使命・役割は何であるか、ということ冷静に、自覚し、事実そのように生きていた、ということにあるのです。自分を見定める深いまなざしと、自分という人間の役割を受け取り、生き、果たそうとしていた、それがまさに驚くべきことでした。

わたしたちはしばしば、ちょっと褒められては、有頂天になり、調子に乗り、ちょっと批判されてはひどく落ち込む、人の評価に右往左往する者です。ましてヨハネは時の人であり、人々の高い評価と、期待とに

包まれていた。そういう中で、動かされず、ぶれず、自分とは何者か、自分の使命とは何か、ということを見定めていた、ということは、驚くべきことです。

ヨハネは、自分とは何者か、自分の使命とは何か、ということ自分をなりに考え抜いて、見定めていたのではありませんでした。そうではなくて、神の言葉に聞き続けていく中で、何度も何度も、くりかえしくりかえし神と向き合う中で、自分とは何者で、何者でないか、自分の役割とは何か、示されて受けとめてきたのです。

ヨハネによる福音書は洗礼者ヨハネのことを語ります。

「神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しするために来た。」

ヨハネのことを語って過不足ない文章です。ヨハネを自分を照らした光を証しするために、遣わされた人だ、というのです。

これは自分が大きな仕事をして、自分を大きくする、という生き方とはまるで違う生きかたです。あるいは自分を大きくしなくても、自分が納得し、自分にとって気持ちのいい、自分らしい生き方をしていく、というのとも全く違う生き方です。自分の人生、自分が愉しく豊かに暮らせればいい、という生き方とも違う。まず、光があるのです。自分を照らし出した光の存在がある。この方を知ってほしい、この方を見つめてほしい、この方の光を受けてほしい、自分はこの人指さし、この方を証しするために、生きる。そのために歩む、そのための人生の時間だ、そういう生き方です。

エルサレムから祭司やレビ人がやって来て、ヨハネを尋問する。それはヨハネの活動が広がり、多くの人々を集めているためにエルサレムの宗教的な権力者たちも不安になってきたからです。ヨハネとは何者なのか、尋問に来たのです。

「お前はだれなのか。」「わたしは救い主ではない。」「お前は何ものなのだ。エリヤか。」「わたしはちがう。」「ではお前はあの預言者か」「ちがう。」ヨハネの明確な自覚が、問答の中にも鮮やかに現れている。

「じゃあおまえは誰なんだ。」

その質問に対してヨハネはこう答える。「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。『主の道をまっすぐにせよ』と。」自分のことをヨハネは「声」だ、と言っている。自分は主イエスへと人々を橋渡ししていく、その道へと人々を呼びかける「声」だ、という。なんという自己理解か。しかも「荒れ野で叫び続ける声だ」、というのです。

荒れ野というのは荒涼とした場所です。人の少ない場所です。だかど

んなにわずかであっても、自分はわたしの後にやってくる救い主、イエス・キリストを指し示す「声」となる、とヨハネは言うのです。「声」としての生涯を生きる、ヨハネはそういうのです。尋問に来た人たちが、メシアでも、エリヤでも、預言者でもないお前がなぜ洗礼を授けるのか、と問いかけると、ヨハネは「あなた方の中には、あなた方の知らない方がおられる。その人はわたしの後から来られる方で、わたしはその履物の紐を解く資格もない。」と答える。もうすでに、あなた方の中に、救い主は到来しておられる。あなた方はまだそれを知らない。わたしはその方の履物の紐を解く資格もないほどのものだ、ということは、比較にもならない方が、すでに到来しておられる、ということです。しかし、わたしはその方を証しする「声」であり続ける。

ジョルジュ・ルオーというよくご存じの画家の描いた「キリストと弟子たち」という絵があります。三人の粗末な身なりの男たちが語らいながら、夕暮れの道を歩いている。道の向こうには赤い色の建物、そして空には夕焼け雲が浮かんでいる。三人のうちの真ん中の一人だけは純白の衣服をまとっている。これはルオーの連作版画「受難（パッション）」の中の一枚です。絵を見るなり、これはエマオ途上での出会いを描いたものだ、と感じる人も多い。十字架刑でキリストが死んだ、という失意のうちに弟子たちがエマオに向かって歩いていくと、一人の人がそばに来て、一緒に歩いていく。そして、どうして悲しんでいるのかと尋ねると、二人は十字架の出来事を知らないのか、と言って話し始める。二人は一緒に歩きながら、この方がキリストとは気づかない。やがて家に入り食事を共にし、二人の眼が開けこの人が主イエスであることを知る。二人は失意の中にあってもかかわらず、キリストが自分たちの歩みに同伴してくださったことに気づくのです。キリストが自分たちの歩みの中で神の言葉を語ってくださったことに気づかされていくのです。

ルオーは我々の人生には同伴者がいてくださる、という喜びと感動を描いている。わたしたちの人生で、最も深い喜びは、同伴者がいる、ということです。親と一緒にいてくれる、妻が、夫が共にいてくれて、子どもが、友人が共に歩んでくれる。不安や痛みを分かち合える同伴者がいる、ということが、不安や痛みに関わらず人生の喜びです。キリストは受難を負いつつ、受難を負う者として、わたしたちの人生の変わらぬ、ひたすらなる同伴者であることをルオー自身も自分の人生の中で気づき、目を開かれてきた。だからこそ感謝と喜びをもって、自分たちの間に立ち給うキリストを描いているのでしょう。

洗礼者ヨハネは、その事実には誰よりも早く、深く、出会い、気づかされていった人でした。彼はキリストの十字架も復活も知ることなく死んでいきました。しかしヨハネは、神の御声に聞く中で、この方こそ、主

なるキリストであり、わたしたちの生と死の同伴者であることを知らされたのです。ルオーが二人の間に立ち給う方を描くことで指さしたキリストを、ヨハネは荒れ野で叫ぶ声として、わたしたちに今も叫び続けているのではないのでしょうか。ヨハネは「声」であり続けた。

アドヴェントに洗礼者ヨハネに聞くのはなぜか、と最初に申し上げました。アドヴェントというのは、「到来」という意味の言葉です。この到来という言葉には二つの意味が込められています。一つはイエス・キリストが生まれたこと、クリスマスの到来です。そしてもう一つは、終末の時の再臨のキリストの到来です。二千年前、キリストが生まれ、救い主がこの世界においでくださったことを誰よりも、しっかりと指さし、声となったのは、洗礼者ヨハネでした。わたしたちもそれぞれの仕方、「声」となる必要があります。キリストはすでに到来して、我々一人一人の生と死の同伴者になってくださっていることを証しし、指さしていく、それがヨハネに続く道です。そして、もう一つ。やがて迎える終末の時に、キリストがわたしたちの救いを完成してくださることを、仰ぎ見、これもまた指さしていく、それがキリスト者の生き方なのだろうと思うのです。